

第六章 出版物の動向

一 昭和二十六年—三十年の主な傾向

朝鮮動乱による好況を機縁として、日本の科学技術はその後の大躍進の基礎を慌しく作り始めた。

学界は海外の学問水準に追いつき追い抜こうと努力し、企業は最新の技術情報を入手するためにさまざまな手段を講じた。このようななかで公表されたP Bレポートは、学界・産業界のみならず出版界にも大きな刺激となった。P Bレポートの正式名称は Office of Publication Board Report—米国商務省出版委員会報告書であるが、その大部分は、独・日・伊等の旧枢軸国の専門的科学技术文献で、第二次大戦末期から米国・英国が占領地に派遣した技術収集団が収集し編集した総合的な文献である。米国では前述の出版委員会から、英国では王室印刷局 (His Majesty's Stationery Office) 及び貿易省 (Board of Trade) から公表、発表された。米・英両国がこれら文献から得た利益は膨大で、如何に高額な賠償金もこれに勝るものではないといわれた程である。この文献の公表によって、旧枢軸国が極秘にしていた技術の宝庫が開かれ、技術者・研究者は求める文献を入手することが出来るようになった。当社に於いてもその翻訳「ドイツ有機合成技術」などを刊行した。

また、朝鮮動乱を契機とした工業の急成長に伴ない、エネルギー消費が急増し、主要製品の生産原価中に占める

燃料費の割合は二割から三割にも達した。そのために燃料およびこれを熱源とする熱の有効利用を目的とした熱管理という分野が重要視され始めた。この事は熱資源の豊富な諸外国に比して戦後の我が国の技術では工業面にもっとも影響を与えたもののひとつである。当社では昭和二十七年に「熱管理便覧」、「熱管理ポケットブック」を刊行、昭和二十八年には「熱管理技術講義」、「燃料便覧」、「熱経済技術要覧」、「本邦コークス工業最近の進歩」、「熱精算」などを相ついで刊行した。

当時、この熱エネルギーは殆んど石炭資源によっていたが、もうひとつの動力源である電力もまったく不足していたため、全国的にダム建設が活潑に行われた。その関係の当社刊行物は昭和二十八年「マスコンクリート」、「フーバーダムの施工の実際」、昭和二十九年「重力ダム」、「原子力発電」などである。

また、この当時、繊維およびその関連工業は異常とも言える活況を呈していた。戦前に桜田一郎京都大学教授が実験室で製造に成功したポリビニルアルコール繊維は、日本最初の工業的合成繊維として合成一号と呼ばれ、後にビニロンという商品名をつけられたが、昭和二十八年当時で、ビニロン三に対し、ポリエステル五、ナイロン六、という割合で化学繊維が製造され、後年化学繊維の急成長を促す萌芽がすでにこの頃に見られた。繊維が一度ガチャンと音をたてると、万という単位で利が得られるところから「ガチャ万」と言われたこの時代を反映し、たとえば昭和二十八年の繊維関係新刊書は、三月刊行の「ビニロンの染色加工」から、「最新染色法」、「醋酸繊維」「毛糸紡績汎論」、「紡織試験の実際」、「毛織物製織法」、「工業用繊維」、「製織準備機構学」、「毛織物事典」など、および十二月刊行の「化繊便覧」の多数に及んでいる。

二 主な出版書

日本建築学会編「建築設計資料集成」は、昭和十七年に1集を刊行し、戦後は昭和二十三年から版を重ねたことは前に記したが、昭和二十六年に2集、翌二十七年に3集を発行した。

1集は昭和十二年十一月以降数年にわたり日本建築学会の機関誌である「建築雑誌」の毎号に掲載された内容を収録したが、2集では1集にまとめた以降の掲載分を主に、関連するテーマを選び、さらに3集では、構造・材料・都市計画・造園までを含めたものであった。昭和二十六年公布の建築士法の目的とする建築技術の向上と建築物の質の改善を、この「建築設計資料集成」刊行の目的としたものであり、A四判という大判の紙面に記載された内容が、建築界一般に与えた影響は甚大なものがある。

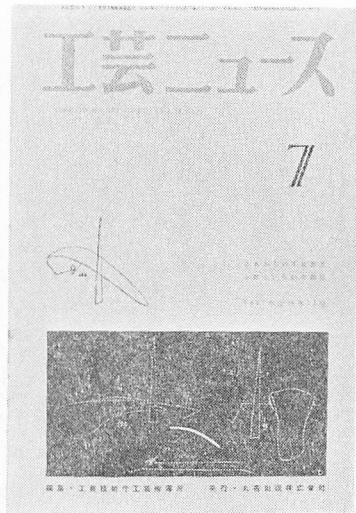
戦前から当社刊行書の特色となっていた便覧が昭和二十七年から続々と発行された。便覧には大別して二種がある。研究および実地での作業に際して即刻利用できる標準的な資料を蒐集して、一覧できるように整理したものと、その分野を専門的に分けて、その特色・傾向・将来展望などを概括的に解説するものである。いずれも目的としては、すぐに読者の役に立ち、しかも、とくに専門外の人々が概要を把握して自らの仕事の位置を他のそれとを有機的に関連づけることができるように構成することである。

昭和二十七年一月に、日本鋳物協会編「鋳物便覧」、六月に中央熱管理協議会編「熱管理便覧」、八月に日本化学会編「化学便覧」、十二月に日本金属学会編「金属便覧」、昭和二十八年には、一月に電気化学協会編「電気化学便

覽」、六月に燃料協会編「燃料便覽」、同じ六月に土木設計便覽編集委員会編「土木設計便覽」、十二月に纖維学会編「化繊便覽」、昭和二十九年には、二月に有機合成化学協会訳編「工業薬品安全取扱便覽」、四月に日本鉄鋼協会編「鉄鋼便覽」、七月に吉田耕作・雨宮綾夫・伊藤清・加藤敏夫・松島與三編「応用数学便覽」、十一月に生産管理便覽編集委員会編「生産管理便覽」と矢継ぎ早に刊行した。それぞれが特色を持ちその後長く斯界に寄与したが、紙数の関係もあって詳述することを割愛したい。

ただ、こういう便覧類は、その分野における多数の専門家を煩わすほかなく、数十人から場合によっては数百人に原稿を依頼して漸く完成するのが常である。企画立案時に目次の微細なところまでをあらかじめ決めて、各専門家の記述が重複しないように配慮し、また、混乱を避けるために記述に使用される用語や単位を一冊の本として統一しなければならぬので、編集作業は難渋を極める。また、数百人のうち一人でも余儀ない事情で執筆が遅延すると、他の人々の原稿が時代遅れとなったりして書き直す必要なども生じることもあるし、通常順調に進行したものでもスタートから完成までかなり期間を要する。その間の執筆者・編集者の払う苦心は、言葉に尽せないものがあり、また必要な資金も莫大なものとなる。

一方、昭和二十七年には、戦後最初の英文翻刻版が刊行された。それはハーバード大学フィーザー教授夫妻著「Textbook of Organic Chemistry」である。フィーザー教授と親交のあった人々、その研究室で研究をした人などが、日本と猫とが大好きな教授の本を、全国の有機化学講座の教官に強力に推薦したため、非常に多くの大学の教科書に採用された。



「Ikkō Nyūsu」

その他、時代的傾向を示すもののうち、いくつかを列举すれば、昭和二十八年、当時スタートしたばかりの民間放送をテーマとした、鳥居博著「商業放送の理論と実際」、昭和二十九年には横文字の宣伝広告がかなり目立ってきたが、その年の六月に刊行の佐藤敬之輔著「英字デザイン」、昭和三十年には、フロリー著 岡小天・金丸競訳「フロリー 高分子化学 上」(当時隆盛を極めていた合成高分子業界の学術的基礎では定本といわれた)、マレー著 杉本朝雄訳「原子核工学」、マンフォード著 生田勉・森田茂介訳「都市の文化 上・下」、ギディオソ著 太田実訳「空間・時間・建築 1・2」、ル・コルビュジエ著 坂倉準三訳「マルセイユの住居単位」などを出版した。「都市の文化」以下の三著は、焼け跡のバラック建築も殆んど姿を消した時期で、都市造営計画に配慮すべき、文化的・技術的問題を示唆する点で意味があったと思う。

当社の出版は単行本が主であったが、昭和二十六年七月より雑誌「Ikkō Nyūsu」を刊行することになった。この雑誌は国家機関として軽工業のデザイン開発・指導を行ってきた工業技術庁工芸指導所の機関誌であった。第二次大戦後は、大量生産される工業生産品にも合理性の上に、更に洗練されたデザインが要求される傾向が強くなった。インダストリアル・デザインが、俄に重視され始めた時代的要求の中で、同所の要請により、その第十九巻二

号からその発行を引受けたのであった。爾来、欧米に比し、著しく遅れていた我が国のデザイン界を刺激し、昭和四十九年七月休刊に至るまで、工業デザインの啓蒙・指導の上で果たした役割は少なからぬものがあつた。この「工芸ニュース」は、当社の出版物としては、極めて特異な存在であつた。

ここで昭和二十六年度良書ベストテンに日本建築学会編「建築設計資料集成 2集」が、昭和二十七年度良書ベストテンに日本建築学会編「建築設計資料集成 3集」、日本化学会編「化学便覧」が入選、また昭和二十七年電気学会文献賞に抜山平一著「電気磁気学 第二巻 電流論」、執行岩根著「電気機械設計論 全三巻」が受賞したことを付記しておく。

なお、昭和二十八年五月一日、丸善出版株式会社は、丸善株式会社に合併復帰して同社出版部となつた。出版部として最初に刊行した書物は、沢瀉作雄著「機械基礎の設計と据付」である。